

# 大試験山の如くに控えたり（虚子）

— 北村さんの記憶のために

瀧野 昌 (Sakae Fuchino)

07年05月04日 (17時10分)

北村市次郎先生が亡くなられたのは、今年の1月25日から26日の深夜にかけてであったと思われるので、あれからもう3ヶ月以上たってしまったことになる。北村さんとは、理学教室の方々の中でも特に親しくしていただいていたので、彼が突然亡くなったことは以来ずっと私の心に重くのしかかっていた。

北村さんとは委員会で一緒のことが多かったことや、北村さんが執筆編集された微分積分学の教科書の校正/改良のことでたびたび私の提案を聞いていただいたこと、また、北村さんも私も夜まで大学に残って仕事をしていることが多かったため、夕食を御一緒させていただいたことも稀ではなかったこと——歩いて近くのお店に行くこともあったし、お嬢さんの車を譲りつけた、という赤いスポーツカーに乗せていただいて遠出をしたこともあった、また、北村さんと仲のよかった大木戸先生と3人になるときもあった——それから理学教室の研修旅行の折のことなど、思い出はつきない。

私が中部大学に移籍した頃の北村さんは、すでに物理学の研究に専念していた時期を終えていらしたようだが、non-standardな実数論に物理学を埋めこむことで物理学の新しい表現が可能ではないか、またフラクタル上の解析学のようなものがそのような表現形式と関連するのではないか、というようなアイデアをあたためておられたようである。そのような興味から、2002年の夏に、日本数学会の数学基礎論分科会のメンバーが回り持ちで行なっているサマー・スクールと

---

(1)以下、口頭呼びならわしていた「北村さん」の呼称を使わせていただく。私が「北村さん」と言うときには、関東弁のアクセントでの「北村さん」であったが、北村さんが私を呼ばれるときに関西弁のアクセントでの「瀧野さん」はまだ私の耳の中に残っている。

称する枠組で、集合論の入門の集中講義を、私が属している名古屋の集合論セミナーが名古屋大学で主催したときには、私が担当した実数の集合論の基礎に関する連続講義を連日熱心に聞きに来てくださったこともあった。

実は、北村さんが大学の彼の研究室で亡くなった日は、私も大学の同じ建物の私の研究室で明け方近くまで仕事をしていたのであった。この夜は「現代思想」という主に哲学者のための雑誌から依頼されたゲーデルの集合論への寄与に関する一般向けはかなり長い論考の最後の仕上げをしていて、このテキストを脱稿したときには4時近くになっていたのではないかと思う。サマー・スクールのときのことでもあったので、北村さんは、このテキストをまず読んでもらいたい一般の読者の最初の何人かのうちの一人であった。それで、この後、家に帰ろうと外に出て、見上げた9号館の建物の北村さんの研究室にまだ明かりがついているのに気付いたとき、一瞬、戻って出来上がったばかりの原稿のコピーをさしあげようかどうかと迷ったのであった。結局、それは思いとどまったのだが、もし私がそのとき北村さんの研究室を訪れていたら第一発見者になっていただろうと思うと複雑な気分になる。

このときの「現代思想」の作文は、出版されると予想以上の反響があり、同業者の大先輩の一人からとてもほめてもらえただけでなく、インターネット上で非常に好意的な感想を書いてくれた人がいたり、未知の人から読後の感想のメールを送ってもらったりもした。しかし、その一方で、この論考は、私が想定していた最良の読者の一人を永遠に失ってしまったのであった。

北村さんは、物理学以外にも幅広い興味を持っておられた方だった。大木戸さんの追悼文にもある国分寺のこともそうであるが、幕末に撮影された集合写真のコピーから、幕末から明治初期にかけて日本で英語教師をしていたフルベッキとその弟子たちについても興味を持って色々調べておられた。たまたま、杉浦日向子の幕末を扱った作品からフルベッキの名前に聞きおぼえがあったので、私も興味をひかれて、少し調べてみた結果を、北村さんにお知らせしたことがあった。

また高浜虚子の句を好んでおられたようで、いただいたメールや文書には時々虚子の句の引用がそえられていた。この文章の題にとつた虚子の句も去年北村さんからいただいたメールに引用されていたものである。

北村さんのメールでは、この「大試験」は大学の入試にかけて引用してあって、だから、この「大」はそこではむしろ皮肉っぽい響きを持っていたのであったが、北村さんご自身は、この間に、虚子の句で本来意味していたであろう人生という「大試験」を卒業されてしまい、「ほな、お先きい」とかなんとか言っつて飄々と去って行かれる背中が見えるようである。しかし、私はまだこれからこの「大試験」と向きあわなくてはならない。

私が中部大学に移籍したての頃、職員食堂で書きかけの論文のためのノートに目を通しながら食事をしていたところ、食堂に来られた北村さんから「食事中そんなに根をつめると体に悪いよ」といつつなことを言われたことがあった。数学者の「コミュニティー」といつても数学をやめてしまった（エルデシユの用語で言えば「死んだ」）自称数学者の「コミュニティー」ではなくて、working mathematicians「コミュニティー」のことであるが——では「根をつめて食事をとらないのは体に悪い」と言われることはあっても「食事中根をつめると体に悪い」と言われることは絶対にならないので、異文化に身を置くことになったことを大いに歎いたものだったのだが、先に鬼門をくぐることになったのは、体に悪いことをしている私ではなく「体に悪い」と注意してくれた北村さんの方であった。

今、『私はまだこれからこの「大試験」と向きあわなくてはならない。』と書いたが、これも、北村さんから、「そんなに真面目に考えると体に悪いよ」とも言われてしまいそうである。

まあ、そういうわけで、私はまだ究極の健康である死に向って「体に悪い」nerosis人の残りを歩まなくてはならないのだろつが、北村さんのようにエレガントな去り方ができるかどつかといふ点についてはちよつと心もとない気がする。